中　学　校

令和４年度

教育研究員研究報告書

社　会

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　研究の視点 ・・ 2

Ⅲ　研究の仮説 ・・ 2

Ⅳ　研究の方法 ・・ 2

Ⅴ　研究内容 ・・ 2

Ⅵ　研究構想図 ・・ 3

Ⅶ　研究の実践事例 ・・ 4

〈１　指導事例１：公民的分野〉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

〈２　指導事例２：歴史的分野〉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

〈３　指導事例３：地理的分野〉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

Ⅷ　研究の成果 ・・ 15

Ⅸ　研究の課題 ・・ 16

研究主題

社会的事象に主体的に向き合い、思考を深められる生徒の育成を目指した単元構成の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

令和３年度に全面実施された中学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、グローバル化の進展や急激な少子高齢化など、変化が激しく予測困難な現代社会において、自ら学ぶ意欲や課題を見いだし追究する力を養うことが重視されている。社会科の目標に示されている「課題を追究したり解決したりする活動」では、単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し、諸資料や調査活動などを通して調べたり、思考・判断・表現したりしながら社会的事象の特色や意味などを理解したり、社会への関心を高めたりする学習が想定されている。

一方で、平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会答申では、主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり、多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であることが指摘されている。近年の国際的な学力調査においても、主体性に関わる項目として、生徒の読解力における「評価し、熟考する」や「自由記述」の項目の正答率は 50％程度であった。［OECD 生徒の学習到達度調査（PISA2018）］

これらの課題解決に向けた手だてとして、学習指導要領には「主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」が挙げられている。そして、指導計画の作成上の配慮事項には、単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、主体的・対話的で深い学びの実現を図ることが示されている。その際、分野の特質に応じた見方・考え方を働かせ、社会的事象の意味や意義などを考察し、概念などに関する知識を獲得したり、社会との関わりを意識した課題を追究したり解決したりする活動の充実を図ることが求められている。また、知識に偏り過ぎた指導にならないようにするため、基本的な事柄を厳選して指導内容を構成するとともに、各分野において、内容の範囲や程度に十分配慮しつつ事柄を再構成するなどの工夫をして、基本的な内容が確実に身に付くよう指導することも求められている。

以上のことから、本研究では、生徒が未来社会を力強く切り拓いていくために必要とされる資質・能力の内の生徒の主体性と思考力に着目し、それらを高めるための単元構成に焦点を当てることにした。また、社会的事象について、課題を主体的に解決しようとする態度を養うため、生徒の課題意識や当事者意識を高め、社会的事象を他人事ではなく、自分のこととして捉える必要がある。具体的には主体性と思考力を育むために、単元を通して当事者意識や課題意識をもたせる工夫と、単元を通して思考を深められる単元構成の工夫を行うこととした。単元など内容や時間のまとまりを通して、自分たちの生活との関連を実感させることに留意し、「課題を追究したり解決したりする活動」に力を入れることで、主体性と思考力の育成を図ることができると考えた。また、主体性を引き出した上で、多様な他者との協働による学習活動を行うことが、生徒が考えを広げたり深めたりするために効果的であると考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の視点

本研究では、教科や分野、単元のねらいを達成するとともに、生徒の社会的事象に対する主体性と思考力を育む中学校社会科の指導の改善・充実を図ることを目的として、次の２点を研究の視点とした。

1　社会的事象を自らの生活と関連付けるなど､課題意識や当事者意識をもたせることにより、主体性（主体的に学習に取り組む態度）を育む。

2　単元の学習内容を活用して問いを追究したり、他者の様々な考えに触れたりすることで、自らの思考を深める。

Ⅲ　研究の仮説

生徒に課題意識や当事者意識をもたせるとともに、課題を追究できるよう単元構成を工夫することで、生徒が主体性をもち、思考を深めることができるだろう。

Ⅳ　研究の方法

○　以下の資料を参考に文献研究を行う。

- 中学校学習指導要領（文部科学省　平成 29 年３月）
- 中学校学習指導要領解説総則編（文部科学省　平成 29 年７月）
- 中学校学習指導要領解説社会編（文部科学省　平成 29 年７月）
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　中学校社会
  （文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター　令和２年３月）
- 令和３年度文部科学白書　第４章　初等中等教育の充実（文部科学省）
- 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」
  （中央教育審議会　令和３年１月 26 日）
- OECD 生徒の学習到達度調査（PISA2018）
  （文部科学省･国立教育政策研究所 令和元年 12 月３日）

○　検証授業や研究員の所属校における取組で得られた成果と課題をまとめる。

Ⅴ　研究内容

1　単元を通した問いを設定するなど、生徒に課題意識や当事者意識をもたせる工夫

→自分たちの生活との関連付け、各単元の第１時での単元を通した問いの設定

2　生徒の思考を深めるための単元構成や授業展開の工夫

→単元の指導順序の工夫、協働的な学び、デジタル端末の効果的な活用

3　単元を通して、学習状況を把握して適切な支援を行うための工夫

→ワークシートの効果的な活用（毎時の学習内容の確認と単元を通した学習内容の確認）

Ⅵ 研究構想図

教科の目標
社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

背景

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　社会編より	
育成を目指す資質・能力の明確化	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進
中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。	子供たちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。
指導と評価の一体化「内容のまとまりごとの評価規準」より	
主体的・対話的で深い学びを実現するため、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点による授業改善は、1 単位時間の授業ごとに考えるのではなく、単元や題材などの一定程度のまとまりごとに検討されるべきであることが示されたものである。	

※下線は、本研究員による。

目指す生徒像　「主体的に学び、考えを深められる生徒」

研究主題	研究の仮説
社会的事象に主体的に向き合い、思考を深められる生徒の育成を目指した単元構成の工夫	生徒に課題意識や当事者意識をもたせるとともに、課題を追究できるよう単元構成を工夫することで、生徒が主体性をもち、思考を深めることができるだろう。

研究内容

1　単元を通した問いを設定するなど、生徒に課題意識や当事者意識をもたせる工夫

→自分たちの生活との関連付け、各単元の第 1 時での単元を通した問いの設定

2　生徒の思考を深めるための単元構成や授業展開の工夫

→単元の指導順序の工夫、協働的な学び、デジタル端末の効果的な活用

3　単元を通して、学習状況を把握して適切な支援を行うための工夫

→ワークシートの効果的な活用（毎時の学習内容の確認と単元を通した学習内容の確認）

Ⅶ　研究の実践事例

１　指導事例１：公民的分野

(1)　単元名

Ａ　私たちと現代社会　(2)　現代社会を捉える枠組み

(2)　単元の目標

ア　現代社会の見方・考え方の基礎となる枠組みとして、対立と合意、効率と公正などについて理解する。人間は本来社会的存在であることを基に、個人の尊厳と両性の本質的平等、契約の重要性やそれを守ることの意義及び個人の責任について理解する。

イ　対立と合意、効率と公正などに着目して、社会生活における物事の決定の仕方、契約を通した個人と社会との関係、きまりの役割について多面的・多角的に考察し、表現する。

ウ　現代社会を捉える枠組みについて、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとする。

(3)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①現代社会の見方･考え方の基礎となる枠組みとして、対立と合意、効率と公正などについて理解している。 ②人間は本来社会的存在であることを基に、個人の尊厳と両性の本質的平等､契約の重要性やそれを守ることの意義及び個人の責任について理解している。	①対立と合意、効率と公正などに着目して、社会生活における物事の決定の仕方、契約を通した個人と社会との関係、きまりの役割について多面的・多角的に考察し、表現している。	①現代社会を捉える枠組みについて、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。

(4)　単元について

本単元は、中学校学習指導要領（平成 29 年３月）社会のうち、公民的分野の内容Ａ「私たちと現代社会」(2)「現代社会を捉える枠組み」に基づき設定している。

本事例では、日常生活や学校生活などの身近な事例を題材とし､「よりよい決定の仕方とはどのようなものか」､「なぜきまりが作られるのか」､「私たちにとってきまりとは何だろうか」などの問いを追究させることで、きまりを守ることの意義や問題を解決する場面での望ましい決定の仕方について、体験的に学ばせたい。「誰の・何を保障するのか」を考えさせることで、契約の重要性や法的な見方や考え方、個人の尊重や平等といった視点が必要であることに気付かせる。現代社会を捉える枠組みの一つである「対立と合意」､「効率と公正」の見方・考え方を確実に習得させるとともに、現代社会の諸課題を主体的に解決しようとする姿勢を身に付けさせ、次の単元以降の学習課題に対する動機付けを図ることが大切である。

課題追究にあたり、簡単に答えが見いだせない状況から問いを見いだし、単元末に第１時と同じ問いを追究する単元構成とした。このことによって、対立を合意へとつなげるために効率と公正、きまりの意義に関する理解を活用し、現代社会で起きている問題について、主体的に向き合いながら、考えたことや選択・判断したことを適切に表現できるようになると考えた。

(5)　単元の指導計画と評価計画（５時間扱い）

○「評定に用いる評価」　●「学習改善につなげる評価」

	目標	学習活動・学習内容	評価の観点		
			知	思	態
	納得のいく物事の決め方とはどのようなものだろうか。				
第１時	・単元の学習課題を理解し、学習内容に見通しをもち、物事の決定の仕方について関心を高める。	・人間が社会的存在であることを身近な具体例から理解し、「Ｔ市の自転車の駐輪場問題」について、Ｔ市がどのような自転車駐輪問題を抱えているか、課題を整理し、どのような対立が見られるか把握する。			●
第２時	・効率と公正の視点を理解し、物事の決定の仕方について把握する。	・部活動の割り当てについて話し合うロールプレイを行い、効率と公正の視点からどのような解決策が考えられるか把握する。 ・社会全体で効率と公正の視点から合意に至る努力がなされていることを理解する。	●		
第３時	・きまりをつくる目的や方法を理解し、個人と社会との関係について把握する。	・部活動の割り当てやきまりを決めるロールプレイを行い、当事者間の立場や主張について考え、よりよい社会をつくるための視点を身に付ける。 ・契約を通した個人と社会との関係、きまりの役割について考察する。	●	●	
第４時	・状況が変化した時のきまりの変更について理解し、それが適切なものであるかを評価検討する観点を把握する。	・体育館での新しい部活動が新設された時のきまりの見直しを考えるロールプレイを行い、きまりが適切なものかを評価する観点を身に付ける。 ・身の回りでルールが変わった例や、身の回りでルールの見直しが必要なものを挙げる。	●		
第５時（本時）	・対立と合意、効率と公正などに着目して、社会生活における物事の決定の仕方、契約を通した個人と社会との関係、きまりの役割についてなどよりよい社会の実現について多面的・多角的に考察する。	・Ｔ市の自転車の駐輪問題の解決策を考えることを通して、社会生活における物事のよりよい決定の仕方、契約を通した個人と社会との関係、きまりの役割について、多面的・多角的に考察する。		○	○

(6)　本時（全５時間中の第５時）

ア　本時の目標

対立と合意、効率と公正などに着目して、社会生活における物事の決定の仕方、契約を通した個人と社会との関係、きまりの役割についてなどよりよい社会の実現について多面的・多角的に考察する。

イ　本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（方法）
導入 ５分	・本時の学習課題をつかむ。 単元を通した学習課題　納得のいく物事の決め方とはどのようなものだろうか。 ・本時で検討する事例をつかむ。 学習課題　Ｔ市の自転車の駐輪場問題の解決策を考えよう。		
展開 ① 15 分	・これまでの学習内容を踏まえて、改めて事例の解決策を検討する。	・これまでに学習したワークシートを参照することを促す。	
展開 ② 15 分	・４人グループをつくり、個人で考えた解決策を発表する。 ・グループで話し合い、整理した解決策を簡潔にデジタル端末に入力し、スクリーンに提示できるようにする。 ・グループで話し合ったことを発表し、解決策がこれまで学習した視点や考え方を生かしたものとなっているか検討する。	・机間指導を行い、必要に応じて適切に助言を行う。 ・デジタル端末はグループで１台使用し、解決策を入力し、入力内容をクラスで共有する。 ・時間配分を見ながら、適宜発表するグループを決める。発表しないグループは、視点や考え方を生かしているのかを検討し、報告する。	
まとめ 15 分	・話合いの全体を通して、課題を解決する時に意識したことを振り返る。 ・現代社会で起きている問題について、具体例を挙げ、よりよい解決策を提案する。	・本時の学習内容を基に、社会的な見方・考え方の観点から必要なことは何かをまとめさせる。 ・次の単元以降の学習課題に対する動機付けを図ることにつなげる。また、本単元の学習内容は公民的分野全体に関わるものだということを改めて確認する。	・効率と公正、ルール、個人の尊重の見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に考察している。（ワークシート） ・現代社会の対立の事例について、学習内容を踏まえて記述している。（ワークシート）

(7)　成果と課題

ア　成果

○　「あなたは社会科の学習について、自分に関わりがあることとして関心をもって取り組むことができていますか。」というアンケート項目に対し、「とてもそう思う」、「そう思う」という肯定的な回答をした生徒の割合は、検証前 89.2％から検証後に 99.3％となり、10.1 ポイント向上した。また、「単元を通した問いについて、仲間の様々な考えを知ることで、一人で考えるよりも自分の考えを深めることができていますか。」という項目に対し、「とてもそう思う」、「そう思う」という肯定的な回答をした生徒の割合は、検証前 96.3％から検証後に 97.9％となり、1.6 ポイント向上した。このことから、本事例で実施した、生徒に課題意識や当事者意識をもたせ、思考を深めるための単元構成や授業展開の工夫には効果があったと考えられる。

○　第１時が終了した段階では、「話合いの方法を学習する。」、「納得する解決案を出すことは難しい。本当にできるのか疑問である。」などの回答が見られた。しかし、単元の学習が終了した際の振り返りでは、「課題を解決するために意識したことや、これまで学習したことをどう生かそうとしたのか振り返りましょう。」という課題に対し、次のような記述が見られた。

・解決するために、効率と公正を第一に考えて案を出し、その案が効率と公正にきちんと合うかを改めて考えることでよい解決案が出る。 ・課題を解決するためには、対立している人のどちらも納得できるような結果を出すことを意識した。考えた解決案に有利不利がないか、無駄がないかなどの視点から見直しをすることも大切である。

これらの回答は、単元構成や授業展開の工夫により表現されたものである。現代社会で起きている問題を解決するために、対立を合意へとつなげるために効率と公正、きまりの意義に関する理解を活用できるような単元構成として工夫することで、知識や概念を生かして思考を深めることができる生徒の育成につながると考えられる。

本事例では、対立と合意、効率と公正などの現代社会を捉える概念的な枠組みを「視点や方法（考え方）」として用いて、現代社会の諸課題を主体的に解決しようとする姿勢を身に付けさせ、動機付けを図ることを大きなねらいとしていた。当事者意識をもって主体的に学習に取り組めるような指導順序、適切な問いを設定した単元構成の工夫により、効率と公正、きまりの意義に関する理解を活用しながら、現代社会で起きている問題について、主体的に向き合いながら考えたことや選択・判断したことを適切に表現できるようになった。

イ　課題

○　生徒が出した解決策を、効率と公正の視点から相互評価し合う場面を、設定することが十分ではなかった。改善に向け、グループで出た解決策を、クラスとして一つにまとめさせ、それを効率と公正の視点から評価させる学習活動を取り入れることが考えられる。そのような学習を設定すれば、限られた授業時間の中でも生徒は思考を深め、さらに思考を可視化することができると考えられるので、今後改めて検証していくことが必要である。

２　指導事例２：歴史的分野

(1)　単元名

B　近世までの日本と東アジア　(1)古代までの日本

(ｲ)日本列島における国家形成(ｳ)律令国家の形成(ｴ)古代の文化と東アジアとの関わり

(2)　単元の目標

ア　律令国家（りつりょうこっか）の確立に至るまでの過程、摂関政治（せっかんせいじ）などを基に、東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族による政治が展開したことを理解する。

イ　東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する。

ウ　古代までの日本について、よりよい社会の実現を視野にそこに見られる課題を主体的に追究しようとする。

(3)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
・大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後天皇や貴族の政治が展開したことや、国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことを理解している。	・律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治、仏教の伝来とその影響、仮名文字の成立などについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・律令国家の確立と天皇や貴族の政治の展開、国際的な要素をもった文化と文化の国風化など、古代までの歴史的事象に関心をもち、そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

(4)　単元について

本単元は、中学校学習指導要領（平成 29 年３月告示）社会のうち、歴史的分野の内容Ｂ「近世までの日本とアジア」の(1)「古代までの日本」に基づき設定している。

この中項目では、我が国の古代の特色を、世界の動きとの関連を踏まえて課題を追究したり解決したりする活動を通して学習することをねらいとしている。そして本単元は、(ｳ)律令国家の形成、(ｴ)古代の文化と東アジアとの関わりで示された知識を身に付けることと、東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する力を身に付けることを目標としている。

以上のことから、本単元では、課題意識をもって東アジアとの接触や交流と、政治や文化の変化に着目して古代の国づくりが変化していったことを理解できるように、「古代の日本はどのような国づくりを目指したのだろうか。」という単元を通した問いを設定し、飛鳥、奈良、平安時代の各時代の政治や文化の特色について、東アジアとの接触や交流という視点から考えさせる。そうすることで生徒たちは、古代の社会の変化の様子を捉えやすくなり、この中項目で取り扱う古代の日本の事象を相互に関連付けて考察させることができると考える。そして、「古代の日本はどのような国づくりを目指したのだろうか。」という問いを追究することで、我が国の古代の特色について多面的・多角的に考察し、歴史的事象を各時代の特徴を踏まえて位置付け、表現できる力を身に付けることを目標とする。

そのため単元構成の工夫として、時代を大観させるために、小単元ごとにならないように中項目から問いを構成するとともに、天平文化の学習の直後に国風文化の学習を配置した。

(5)　単元の指導計画と評価計画（16 時間扱い）

○「評定に用いる評価」●「学習改善につなげる評価」

	目標	学習活動・学習内容	評価の観点		
			知	思	態
第１時	・単元の課題を設定し、それにつながる情報を資料から適切に読み取り、表現する。	・教科書や小学校での学習を踏まえ単元の課題について考察し、まとめる。			●
第２時	・聖徳太子がどのような国づくりを目指したか資料から適切に読み取り、理解する。	・聖徳太子に関する中国の歴史書から、聖徳太子が目指した国の像を読み取り、発表する。	●		
第３時	・飛鳥文化の資料から外国の影響を考え、表現する。	・飛鳥文化に関する資料から飛鳥文化に見える外国の影響を読み取り考察して、まとめる。		●	
第４時	・中大兄皇子と中臣鎌足がどのような国を目指したか資料から読み取り、理解する。	・改新の詔などの資料から大化の改新の目的を読み取ってまとめ、発表する。	○		

第５時	・白村江の戦いの歴史的意義を考え、表現する。	・白村江の戦いの目的と影響を資料から読み取り考察して、発表する。		○	
第６時	・大宝律令によりどのような国づくりを目指したか資料から読み取り、表現する。 ・飛鳥時代を大観し、どのような国づくりが行われたのかこれまでの学習からまとめ、表現する。	・大宝律令の条文からその目的を読み取って考察し、話し合い、まとめる。 ・第１時から第５時までの学習課題に対する答えを時代まとめシートにまとめ、その共通項を発見し、話し合い、まとめる。			●
第７時	・平城京遷都によりどのような国づくりを目指したか資料から読み取り考え、表現する。	・平城京の地理的、考古学的資料から、平城京の特徴を読み取り考察して、まとめる。		●	
第８時	・古代の税による人々への影響を資料から読み取り、中国の制度が日本にそのまま当てはまらないことを読み取る。	・貧窮問答歌などの資料から当時の人々の生活を読み取り、文章や絵にまとめる。	○		
第９時	・唐の均田制をそのまま導入した班田収授法が日本になじまず、私有地を認めた理由を考え、表現する。	・戸籍から逃散・偽籍が行われたことを読み取り、律令制度が立ち行かなくなり、荘園が発生したことを考察し、まとめる。		○	
第10時	・天平文化の特徴を理解する。 ・奈良時代を大観し、どのような国づくりが行われたのかこれまでの学習からまとめ、表現する。	・天平文化の特徴を教科書からまとめる。 ・第７時から第９時までの学習課題に対する答えを時代まとめシートにまとめ、その共通項を発見し、話し合い、まとめる。			●
第11時	・国風文化とその時代背景、特徴を資料から適切に読み取る。 ・国風文化の特徴から、飛鳥・奈良時代との相違点に気付き、なぜその違いが生まれたのか課題意識をもつ。	・仮名文字の背景と文化の特徴を資料から読み取り、考察し、まとめる。 ・時代まとめシートから飛鳥・奈良時代との相違点を見いだして話し合い、課題を設定する。	●		
第12時	・平城京と平安京の資料から適切に情報を読み取り、平安京に遷都した目的を考え、表現する。	・平城京と平安京の資料から相違点を読み取り遷都した理由をまとめる。		●	
第13時	・朝廷による蝦夷「征討」の目的と影響を資料から読み取り、表現する。	・朝廷側と蝦夷側から多角的に朝廷の攻撃を考察し、その影響をまとめる。	○		
第14時	・藤原道長や天皇がどのような政治をしたのか考え、表現する。	・藤原道長が権力をにぎった理由とその政治を資料から読み取り、まとめる。		○	
第15時	・遣唐使が日本に与えた影響とそれを停止した理由を資料から読み取り、表現する。 ・平安時代を大観し、どのような国づくりが行われたのかこれまでの学習からまとめ、表現する。	・遣唐使に関する資料から遣唐使を停止した理由を多面的に考察し、まとめる。 ・第11時から第15時までの学習課題に対する答えを時代まとめシートにまとめ、その共通項を発見し、話し合い、まとめる。	○		●
第16時 (本時)	・古代を大観し、飛鳥・奈良・平安時代の朝廷がどのようにしてどのような国づくりを行ったのか説明する。	・飛鳥から平安時代の特徴を明らかにし、出来事・人物・制度の中から重要と考えるものを挙げ、古代の特徴をまとめる。		○	○

(6)　本時（全16時間中の第16時）

ア　本時の目標

古代を大観し、飛鳥・奈良・平安時代の朝廷がどのようにしてどのような国づくりを行ったのか説明する。

イ　本時の展開

時	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（方法）
導入 ５分	・前時までの内容を振り返る。 ・原始時代の特徴を確認する。 ・本時の課題を確認する。	・学習ポイントを板書する。	

展開 30 分	学習課題　古代の朝廷はどのようにして、どのような国づくりを行ったのか。		
	・３枚の時代まとめシートや教科書から古代を代表する人物や出来事などを挙げる。（個人） ・挙げた人物や出来事などを、班で共有する。（班） ・班でキーワードを３つ挙げ、デジタルを用いてクラス全体で共有する。（班） ・班ごとにその人物や出来事などを挙げた理由を発表させる。（班）	・キーワードを挙げる視点を明確化する。 ・３人または４人班を編成する。 ・飛鳥・奈良・平安の各時代を班ごとに割り当てる。	・根拠をもって挙げようとしている。（机間指導・ワークシート） ・次の学習へのつながりを見いだそうとしている。（机間指導・ワークシート）
まとめ 15 分	・教師のまとめを聞き、時代まとめシートにどのような内容をまとめればよいか見通しをもち、本時の問いに対する考えを記入する。 ・教師のまとめを聞く。	・中世には武士の世の中になったが、古代がその基盤となったことについて触れる。	・古代の社会の変化の様子について、文章や図などでまとめ表現している。

(7)　成果と課題

ア　成果

○　「あなたは社会科の学習について、自分に関わりがあることとして関心をもって取り組むことができていますか。」というアンケート項目に対し、「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的な回答をした生徒の割合が、検証前 81.2%から検証後に 96.7%となり、15.5 ポイント向上した。また、時代まとめプリントへの生徒の記述では、学びを振り返り、「中央集権制など奈良時代があったから今の日本がある。」と書いている生徒も見られた。このことから、単元を通した問いの設定や他の時代との比較・関連の視点での授業によって、生徒が自身に関わりのある課題として捉えやすくなっていることが考えられる。

○　「教科書の学習順序を逆転して授業をしましたが、学習のしやすさについてどう思いますか。」というアンケート項目に対し、「学びやすかった」と回答した生徒が 64.8%、「特に変わらない」と回答した生徒が 32.0%、「逆転しない方がよい」と回答した生徒が 3.3%であった。また、「単元を通した問いについて、仲間の様々な考えを知ることで、一人で考えるよりも自分の考えを深めることができていますか。」というアンケート項目では、「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的に回答した生徒の割合が検証前 88.5%から検証後に 96.7%となり、8.2 ポイント向上した。また、アンケートの自由記述欄には、「他の人と意見を交わして深めていける」、「新しい考えをもてる」という記述も見られた。このことから単元構成を工夫して指導順序を入れ替えたり、話合い活動を通して意見交換したりすることで、生徒の思考が深まっていると考えられる。

○　「時代まとめプリントによって飛鳥・奈良・平安時代を理解する上で役に立ったと思いますか。」というアンケート項目に対し、「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的な回答をした生徒は 99.2%であった。このことから生徒自身が自らの学習を振り返って学習の調整を図ったり、時代を大観して各時代の特色を捉えたりする上で、時代まとめシートは考

えを深めることに役立っていることが分かる。また、単元をまとめるワークシートに古代の日本をつくる大きな要素に「外国との交流」を挙げ、「古代の前半は外国の真似をし、後半は日本独自の国づくりをした。」と書いた生徒もおり、時代の特徴を捉えられた生徒もいた。

イ　課題

○　本時で時代ごとの重要人物や出来事などを挙げ、その理由を考えさせる時間を短くし、時代のまとめにかけられる時間をより多くとると、本時の目標に迫りやすくなった。

○　特権階級である貴族のイメージを摂関政治の授業で理解させる前に国風文化を学ぶ学習順序のため、生徒が貴族の裕福さにイメージをもちにくい部分があった。貴族の生活に関する資料を用いて裕福さのイメージをもたせる必要がある。

○　荘園の資産価値が重視されたことの学習を平安時代の中盤に行うことで、武士のおこりに始まる中世への学習のつながりに気付かせる工夫が必要である。

３　指導事例３：地理的分野

(1)　単元名

C　日本の様々な地域　(3)日本の諸地域　東北地方

(2)　単元の目標

ア　東北地方が抱える人口の問題について、その自然環境の特徴や産業との関係を把握した上で理解する。

イ　東北地方が抱える人口の問題について、地域的特色を踏まえた上でその解決策を考察し、構想する。

ウ　東北地方の学習内容や自己の生活体験を振り返り、過疎と過密の問題を自分の事として捉え、主体的に追究、解決しようとする。

(3)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
・東北地方が抱える人口の問題について、その自然環境の特徴や産業との関係を把握した上で理解している。	・東北地方が抱える人口の問題について、それぞれの地域的特色を踏まえた上でその解決策を考察し、構想している。	・東北地方の学習内容や自己の生活体験を振り返り、過疎と過密の問題を自分の事として捉え、主体的に追究、解決しようとしている。

(4)　単元について

日本地誌全体のテーマとして「大都市圏と地方の共生」を掲げて取り組んだ。「大都市圏と地方の共生」は、現代日本が抱える様々な課題や地理的な事象と大きく関わりのある課題であるため、中項目全体を通して考えることにした。最初の「学習のまとまり」である九州地方と北海道地方から過疎について取り上げ、その後も各地でそれぞれの中核となる視点に関連させ、「人口」の問題について各「学習のまとまり」で触れてきた。

そのまとめとして「人口」をテーマとし、過疎の進行が顕著な東北地方と逆に最も人口が集中する関東地方を対比して学習し、地誌のまとめの「学習のまとまり」としていく。東北地方から流出した人口の多くは生徒自身が暮らす東京都を中心とする関東地方に流入しているため、この人口の問題を生徒自身に身近な問題として考えさせたい。

次に単元指導計画の作成手順について説明する。※以下は東北地方（小単元にしぼって記載）

単元指導計画作成の手順

① 生徒に捉えさせたいその地域の「地域的特色」を設定する。
② 地域的特殊性により、その地域に見られる「課題」を設定する。
③ ①・②を包括した「単元を通した問い」を設定する。
④ そのために必要な知識や技能はどのようなものがあるかを挙げていく。
⑤ 地理的な見方・考え方を働かせ、知識・技能や思考力・判断力・表現力を高めるために効果的な各次の授業（問い）をつくっていく。

○　東北地方の地域的特色と課題・・・①②

東北地方は日本の約２割の面積を占めている広大な地域だが、その約７割は森林、約８割は豪雪地帯となっている。それに加えて東北を縦断する奥羽山脈や出羽山地、北上高地が交通を遮っており、人間が生活していく上での困難が多く存在する。このことは深刻な高齢化、過疎化の一因となっており、消滅する可能性の高い都市が多くなっている。本単元ではこのような地方的特殊性を地理的な視点から見いだすと同時に、日本全国の約 15%の生産高を占める農業や、豊かな漁場で行われる漁業、伝統・文化の盛んな東北地方の魅力についても気付かせ、東北地方が持続可能な地域であるための在り方を構想させたい。

このことから立てた単元を通した問い

○　単元（小単元）を通した問い・・・③

「東北地方の過疎を解決するためにはどのような対策が効果的だろうか。」

第１次の始めに東北地方で過疎が起きている事実を資料から読み取らせる。その後、東北地方の地域的特色を捉えながら、地域的特色と過疎との関連を第１次～第４次で見いだしていく。第５次からは単元を通した問いについて具体的に考えていく。解決策については、現実的に困難であったり、東北地方の実態に即していなかったりする解決策を挙げてしまうことが考えられる。そこで、第５次には他地域の過疎対策の例を紹介する。

第１に、サテライトオフィスを設置しつつ、豊かな自然など地域の魅力を生かして地域の活性化を図る方策である。こうした「徳島県神山町」の取組のように地域の魅力や強みを生かしてそれを PR していく方法を東北地方でもとれるかを生徒に考えさせる。

第２に、「コンパクトシティ」の取組である。これは住民が生活する場所と自然や農地がある場所を分けていく施策で、人口を一部に密集させることで過疎によって生まれる様々な課題が解決され、新たなコミュニティを生むことができるものである。どちらもメリットもあればデメリットもある施策であり、生徒には２つの考えのどちらが「東北地方の過疎」を解決するための手段として適しているかを価値判断させる。また、「その他」の選択も可能とすることで自由な発想や、より発展的な解決策が出る余地を残しておく。

(5)　単元の指導計画と評価計画（６時間扱い）

○「評定に用いる評価」　●「学習改善につなげる評価」

	目　標	学習活動・学習内容	観点		
			知	思	主
第１次 （１時間）	・過疎の一因となっている東北地方の自然環境や気候の特徴を理解する。	・資料から東北地方で過疎化が進行していることや東北地方の自然環境や気候の特徴について読み取る。	●		●
第２次 （１時間）	・東北地方の特徴的な自然環境と産業の関係を関連付けて考える。	・東北地方の自然環境の特徴と第一次産業の特徴の関係について考える。	●	●	
第３次 （１時間）	・東北地方の特徴的な伝統文化と自然環境や産業を関連付けて考える。	・東北地方の伝統産業や伝統行事について理解し、それらが東北の特徴的な気候や産業とどう関連付いているかを考える。	●	●	
第４次 （１時間）	・資料から読み取った情報や、本単元で学習した知識を活用して、東北地方の過疎の原因について理解する。	・新たな資料やこれまで学習してきた地理的事象から過疎の原因となっていることを整理し、東北地方の過疎の原因を見付け出す。	○		
第５次 （２時間） 本時	・東北地方の地域的特色を理解した上で過疎問題の解決策を選び、そう考えた理由を説明する。	・過疎対策として、地域の魅力を活用する方法と、コンパクトシティについて知る。 ・トゥールミンモデルを用いて、東北の過疎の解決方法を考える。（「地域の魅力の活用」、「コンパクトシティ」、「その他」のいずれかから解決策を選び、そう考えた理由を説明する。）→自分のプリントの写真を撮ってクラス共有のスライドに貼り付ける。		○	○
		・班内で役割分担し、それぞれのスライドを開いて、良い意見を探す。 ・良い意見を班内で共有し、議論する。 ・他者の意見を参考にして最終意見を答える。（デジタル端末で入力）			

(6)　本時（全６時間中の第６時）

ア　目標

他者の意見も踏まえ、東北地方の地域的特色に合った過疎の解決策を考え、その理由を説明する。

イ　展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準 （方法）
導 入 ４分	・本時の問いと授業の流れを確認する。	・本時の予定を説明し、東北地方の学習のまとめを行うことを理解させる。	

展 開 ① 17 分	単元を通した問い 東北地方の過疎を解決するためにはどのような対策が効果的だろうか。		
	・対策の評価のポイントを読む。 ・デジタル端末で共有ソフトから、それぞれが指定されたスライドを開き、参考になりそうな意見を見付け出す。 ・班でそれぞれが良い意見だと考えた人のスライドを紹介し合う。 ・意見交換を踏まえて自分の思考を整理する。	・評価のポイントを示す。 ・良い意見を書いているスライドの番号をプリントにメモするように指示する。 ・班に分かれるように指示を出し、意見交換の目的や方法を説明する。 ・メモ欄を使って最終意見に何を書きたいかを整理することを促す。	
展 開 ② 22 分	・班員の意見を参考にして自分の最終的な意見を記入する。 （17 分） ※原則デジタル端末で入力する。	・デジタル端末も含め何を見ても良いし、何を使ってもよいことを伝える。 ・他の生徒の参考になるような意見を書いている生徒を事前に把握しておく。	・東北地方の地域的特色を理解した上で過疎問題の解決策を選び、理由を説明している。（単元まとめテスト）
ま と め 7 分	・指名された生徒の発表を聞き、参考にする。 ・単元全体を振り返るとともに次の単元の学習に向けて見通しをもつ。	・事前に把握しておいた２～３名を指名して発表させる。 ・過疎の問題の裏には我々が暮らす関東地方が大きく関わっていることについて説明する。	

(7)　成果と課題

ア　成果

○　「あなたは社会科の学習について、自分に関わりがあることとして関心をもって取り組むことができていましたか。」というアンケート項目に対し、「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的な回答をした生徒の割合が検証前 85.5%から検証後に 86.7%となった。また、振り返りシートの記述に「東北の農業や漁業が自分たちの生活に深く関係していることを知って、この過疎の問題が他人事とは思えなくなった。いつも以上に真面目に取り組まなくてはいけない。」という記述が見られた。他にも東北地方という「身近でない地域」と「自分たちの生活」に関わりを見いだした生徒の記述が多く見られた。

　このことから、東北地方から流出した人口の多くは自分たちの住む首都圏に流入していることや東北地方の農業や漁業が日本の食を支えている事実を学習するという単元構成の工夫で生徒が東北地方の過疎を自分の事として捉えられるようになったと考える。

○　単元の構成を工夫し、東北地方の全時間で過疎の問題を地理的事象に関連付け、他地域でも人口の問題に触れたことで生徒の思考や解答に深まりが見られた。次の生徒のように学習前と学習後の記述に変化があった。

【生徒の記述例】

単元を通した問い「東北地方の過疎を解決するためにはどのような対策が効果的だろうか。」

単元の学習前の記述

観光業を盛んにして都心の人々や他地域の人々を呼び込む。東北での交通網を整備する。

「学習前の記述」でもこれまでの学習を生かして解決策を考えられているが、具体的に東北の課題に合った現実的な過疎対策にはなっていない。「学習後」は東北地方の学習を生かし、「東北地方の過疎対策」について具体的に説明することができている。

最終意見

東北地方で過疎が起こっている原因としては少子高齢化が進み、若者が少ないことと豪雪地帯で自然環境が厳しいため、生活しづらいことが挙げられると思う。若者が少ない中で、東北の人たちが残って仕事をすることを促すよりも、他の地域から人を呼び込んだ方が少子高齢化の解決につながる。農業や漁業など、若者が好まない職業の他に、通信インフラを神山町のように整えることで、新しい事業が始められ、地方から若者を呼び込めることにつながると思った。また、どこでもできる職業をもっている人を呼び込むことで、さらに少子高齢化が解決していくと思った。

生活がしづらい点に関しては、コンパクトシティなどの一つの都市を作ることで、家から医療機関までの距離が近くなり、高齢者が一人または二人だけで暮らしているところも多い東北地方の人たちにとってとてもいいことだと思う。このコンパクトシティができると、「神山町」の自然環境を生かしたという点で、自然環境が厳しい東北地方にとっては、デメリットのところも、住みやすい都市になることで、仕事ができる環境が整う。また、東北地方は人が住んだり、働いたりできる平地が少ないため、「神山町」のように土地をたくさん提供することは難しい部分でもあるが、コンパクトシティにより、仕事の場所を集中させることで、少し改善されると思った。「神山町」とコンパクトシティを組み合わせることで、「神山町」がもっているデメリットをカバーし、東北地方の過疎の解決につながると思った。

○　「単元を通した問いについて、仲間の様々な考えを知ることで、一人で考えるよりも自分の考えを深めることができていますか。」というアンケートへの回答では検証前 91.6%、検証後 93.6%の生徒が「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的な回答をしている。本時ではただ過疎対策を考えて発表させるだけでなく、デジタル端末を用いてクラス全員の考えを共有したり、他者の意見を踏まえて議論したりすることでより多面的・多角的な視点で過疎の解決策を考え、自身の意見を深めることができ、そのことを生徒も実感できていることが分かる。

イ　課題

○　良い意見を見て、紹介し合うだけでなく、なぜその意見が良いと考えたのかを伝え合うと、さらに論理的な思考力を高められ、議論が深まるグループワークになったと考える。

○　アンケートで否定的な回答をした生徒は学習の習熟が十分でない場合が多かった。全ての生徒の学びを保障できるように単元や授業の構成を工夫していく必要がある。

Ⅷ　研究の成果

本研究では、生徒の「主体性」を引き出し、「思考力」を深めることを目指し、以下のように、課題意識や当事者意識をもたせ、課題を追究できるよう、「単元構成の工夫」のある授業を実践した。

研究内容		指導事例１　公民的分野	指導事例２　歴史的分野	指導事例３　地理的分野
1	単元を通した問いを設定するなど、生徒に課題意識や当事者意識をもたせる工夫	・日常生活や学校生活などの身近な事例を題材とすることで、体験的に学ばせる。	・単元を通した問いを設定することで、古代の日本の事象を相互に関連付けて考察させる。	・東北地方の過疎が生徒自身が暮らす東京都を中心とする関東地方と関係があることから、人口の問題を生徒自身に身近な問題として考えさせる。

2	生徒の思考を深めるための単元構成や授業展開の工夫	・単元構成の工夫として、課題追究にあたり、単元末に第１時と同じ問いを追究する。 ・デジタル端末を活用し、思考を可視化したり、グループや学級全体で意見を共有したりする。	・単元構成の工夫として、時代を大観させるために、小単元ごとにならないように中項目から問いを構成する。 ・天平文化の学習の直後に国風文化の学習を配置する。	・単元構成の工夫として、諸地域全体で人口について触れる。 ・デジタル端末を活用し、思考を可視化したり、グループや学級全体で意見を共有したりする。
3	単元を通して、学習状況を把握して適切な支援を行うための工夫	・ワークシートで、課題を解決するために意識したことや、これまで学習したことをどう生かそうとしたのか振り返らせる。	・時代まとめプリントを活用することで生徒自身が自らの学習を振り返り、学習の調整を図ったり、時代を大観したりさせる。	・毎時間、振り返りシートを書かせることで、生徒自身が自らの学習を振り返り、学習の調整を図ったり、考えを深めさせたりする。

↓

生徒の変容	・現代社会に見られる様々な対立について、効率と公正を判断基準にして物事を考える生徒が見られるようになった。	・話合いの活動の中で、古代が現代の基礎になっていることに気付き、中央集権制などの具体的な事例に着目する生徒が見られるようになった。	・東北地方の地域的特色と過疎の原因を関連付けて捉えることで、より具体的に東北地方の過疎の解決策を考えられる生徒が見られるようになった。

単元の学習内容の中から、生徒の生活と関連付けやすいものを選び、単元の学習の中で課題意識や当事者意識といった視点をもたせることは、主体性を引き出す上で有効であった。全体として、単元を通した問いの核心に迫っていく過程で、「課題を追究したり、解決したりする活動」を単元計画のどこに設定するのかという点に留意することが、単元を通した問いの工夫につながり、単元構成の工夫が単元全体での効果的な学習に結び付いたと考えられる。

その結果、地理、歴史、公民の各分野で、「主体性」、「思考力」ともに、望ましい生徒の変容を確認することができた。社会との関わりを意識した課題追究や課題解決、デジタル端末を活用した思考の可視化、他者の思考との比較など、様々な学習活動の相互作用により、「主体性」と「思考力」が深まったことがアンケートやワークシート等の記述から確認することができ、検証授業を通して「単元構成の工夫」の効果を十分に実感できるものとなった。

Ⅸ　研究の課題

○　単元構成の工夫の意図が生徒に伝わってこそ効果が高められる。

単元構成の工夫を前提とした授業計画には、教科書と違う展開になることで、生徒が不安になる場面があった。教科書で示されている学習のつながりをあえて変えることに全ての生徒が意義を見いだせるように計画を立てる必要がある。また、どの単元での工夫が特に効果的か、生徒の実態に合わせながら検討する必要がある。

○　今後の指導におけるデジタル端末の活用の量的・質的改善が求められる。

一人１台学習者用端末の活用は、学習の幅を大きく広げるものである。そのためには、生徒も教員もデジタルスキルを高めていく必要があり、普段の授業から活用していることが重要となる。デジタル端末の活用を通して、自他の考えを比較し、自身の考えを深化させられることから、今後はデジタル端末を活用した表現力や発信力の育成を目指していくことが重要である。

令和４年度　教育研究員名簿

中学校・社会

学　校　名	職　名	氏　名
世田谷区立瀬田中学校	主任教諭	田中　明日香
練馬区立谷原中学校	主任教諭	堀越　啓祐
町田市立鶴川第二中学校	主幹教諭	◎鈴木　淳史
東村山市立東村山第四中学校	主任教諭	白澤　保典
日の出町立平井中学校	主任教諭	坂本　生輝

◎　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部義務教育指導課
統括指導主事　國長　泰彦

令和４年度

教育研究員研究報告書
中学校・社会

令和５年３月

編　　集　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９